

『今和次郎「日本の民家」再訪』

(平凡社、2012年3月)

瀝青会

正会員	中	谷	礼	仁	君	
正会員	御	船	達	雄	君	
正会員	福	島	加	津	也	君
正会員	清	水	重	敦	君	
	石	川		初	殿	
	大	高		隆	殿	
	菊	地		暁	殿	

本書は、今和次郎による約 90 年前の名著『日本の民家』で取り上げられた日本全国に散在する民家を訊ね歩いた旅行記である。あまりに平易で読みやすい形式でまとめられているため、旅行記と思ってしまいたくなるが、旅行記の体裁をとった調査記録集と言った方が適切かもしれない。まずは、90 年前の民家の所在確認から始めねばならないのだから、その苦労は並大抵のものではない。『日本の民家』におけるテキストとスケッチおよび図版の詳細な検討から旅の準備が開始され、ようやく調査がスタートする。当時の姿を思い浮かべながら、現在ではいかなる変容を遂げているかといった期待と不安が文面からひしひしと伝わってくる。

しかしながら頁をめくるにつれ、目的の民家を探し当てるのが容易ではない事実が浮かび上がる。附章の再訪成果一覧表によれば、調査対象とした 45 事例のうち、敷地を特定できたのが 20、街区を特定できたのが 11 であり、半数以上は大まかな所在地しか判別できなかったことがわかる。和次郎の旅以降、戦災に見舞われ、高度成長を遂げ、公害問題や都市化の波に揉まれ、日本の国土はこの間にその隅々まで大きな変貌を遂げた。市井の民家がそのまま存続していることの方が奇跡なのである。

そうであるならば、著者らの目論みはどこにあるのか。本書の特筆すべき点はどこにある。和次郎が直視し記録した民家の所在確認を超えて、近代日本の住まいの変容を見定めると同時に、漁村や山間集落といった日本人の営みが長い時間の中で紡ぎ出した住まいの集合の形式に眼差しを注いでいるのである。言い換えれば、和次郎の著作をガイドラインとして、現代では忘れ去られた日本の住まいのさまざまな型とそれらの生息を可能とする環境の型を探し求めたフィールドサーベイの記録である。随所に散りばめられた再訪スケッチ（集落全体および局所的な場所や建物の実測スケッチ）は、そうした内容を伝えるに十二分な効果がある。本書全体を通して、現代社会の隅々に否応無しに浸透する近代技術に翻弄されながらも、なおかつそれらと無縁な地平で立ち尽くす人間の生の根源を見るようでもあり、工学技術によって社会の回復を詠ったサステナビリティという流行りのフレーズを一蹴しうる破壊力さえ秘めていることを窺える点が高く評価される。

先にも述べたが頁の大半は旅行記の形式をとっているのだから読みやすく、また附章に調査報告としての論文が掲載されているので、この手の調査を学術的形式でまとめる手引きとしても価値がある。また、巻末に納められた数葉のカラー写真も臨場感に溢れ、著者らの

執筆意図および旅の臨場感を補完するに余りあるものとなっている。このように、日本人の住まいと日本の国土の変容を今までにない角度から捉え、平易な文体で綴られたこの著作は、建築文化の社会への普及啓発に大きく寄与し、また貢献した。

よって、ここに日本建築学会著作賞を贈るものである。